

アヤナミノメイガ *Eurrhyarodes accessalis* の  
幼虫の巣作りについて

徳本 正

「山口県の自然」第77号（2017年3月）別刷

山 口 県 立 山 口 博 物 館

## アヤナミノメイガ *Eurrhparodes accessalis* の幼虫の巣作りについて

徳本 正<sup>1)</sup>

### アヤナミノメイガについて

アヤナミノメイガ *Eurrhparodes accessalis*は、昆虫綱・鱗翅目・ツトガ科・ノメイガ亜科に属する蛾の仲間である。日本では本州、四国、九州、佐渡、対馬、屋久島、奄美大島、宮古島、石垣島などに、海外では中国に生息する。成虫は開張16~19mmで、翅は灰褐色の地に淡黄色の斑紋がある。5月~9月に出現し、他のノメイガ類と同様、飛行後は低草の葉の裏に素早く隠れる。灯火にもよく飛来する。アヤナミノメイガ幼虫（以下、幼虫）が食餌する植物は双子葉類・ナデシコ目・ヒユ科のムラサキイノコヅチ、ヒカゲイノコヅチ、ヒナタイノコヅチなどが知られている。

### 蛾類の巣について

巣とは一般的には、ほ乳類や鳥類が出産や産卵、休息や就眠のため、自ら作って使用する構造物のことをいう。この報文でいう巣とは、「完全変態する昆虫が蛹を保護するための構造物」と定義する。

カイコガ、ヤママユガ、ウスタビガ、イラガといった絹糸腺の発達した蛾は繭（巣）を作り、その中で蛹になり、翅化の時期を待つ。また、スズメガ科は繭（巣）は作らず、地中で蛹になる。ハマキガ科やノメイガ亜科の多くは繭は作らないが、葉を利用した巣を作り蛹を保護するものが多い。

今回報告する幼虫は先述のヒユ科植物の葉の一部を切り取って巣をつくり落下させ、その中で蛹になることが知られている。しかし、この巣の作り方について、報告された例は少ない。

### 調査地および調査方法について

調査は山口市徳地小古祖の須賀神社脇の農道の一画で実施した。周辺には須賀神社の鎮守の森、水田、民家があり、農道には雑草が繁茂している。

2016年6月25日午前、本調査地で幼虫がヒカゲイノコヅチの一葉を利用し、巣を作っている場面に遭遇した。直ぐさま、ビデオ・写真撮影を行い観察することにした。また、天候・気温等、気象に係る状況について記録した。その後、映像分析を行い、本報告をとりまとめた。

### 観察した事例について

[日時] 2016年6月25日 午前9時38分~午前10時48分

[場所] 山口市徳地小古祖の須賀神社脇の農道の一画（「調査地および調査方法について」参照）。

[天候] くもり。南西の風がややあり。気温22.0~23.0℃

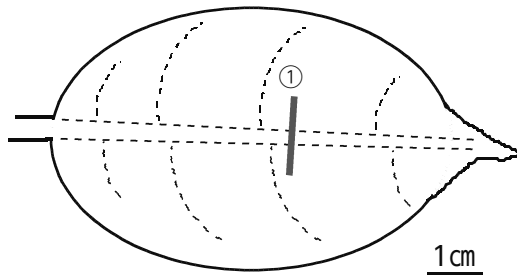
[幼虫の体長] 約1.7cm

[観察した事柄]

---

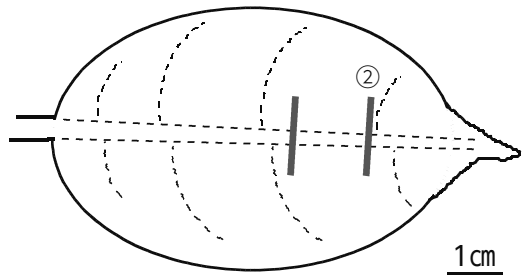
1) TOKUMOTO, Tadashi 萩市立見島中学校 〒758-0701 萩市見島953

1 ブリッジ①の製作(午前9時38分33秒)~9時44分05秒



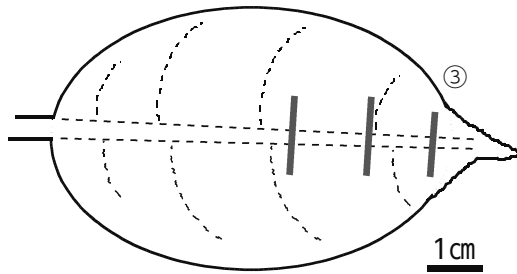
幼虫が主脈に沿って体を置き、頭部を左右に振り、左葉と右葉をつなぐブリッジ(赤棒)①を作っていた。その途中から観察を開始した。ブリッジは5分35秒後に完成した。

2 ブリッジ②の製作 9時44分25秒~9時51分51秒



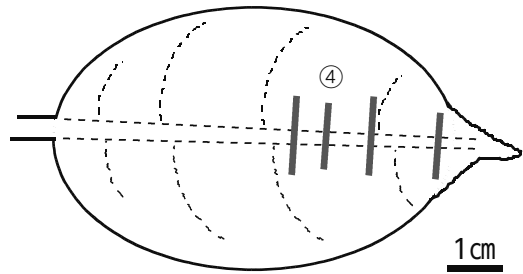
①の右側、ちょうどこの幼虫の体長の幅を開け、別のブリッジ②を完成させた。このブリッジ②を完成させるのに7分46秒を要した(図1)。

3 ブリッジ③の製作 9時52分30秒~10時00分40秒



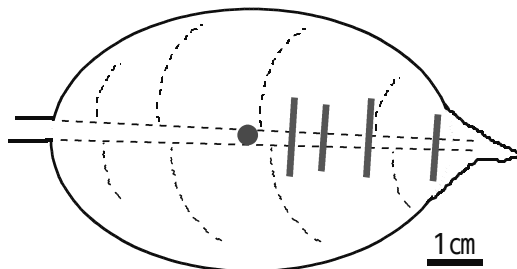
②の右側、幼虫の体長より幾分狭い幅を開け(ヒカゲイノコツチの葉先の狭まった部分)、別のブリッジ③を完成させた。このブリッジ③を完成させるのに8分10秒を要した。

4 ブリッジ④の製作 10時01分52秒~10時09分44秒



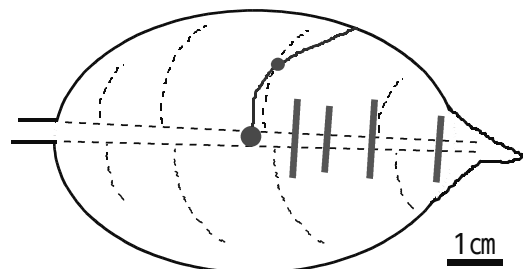
①と②の間にブリッジ④を完成させた。このブリッジ④を完成させるのに7分52秒を要した。4本のブリッジが完成し、葉は主脈をはさんで左葉と右葉が狭まった。

5 主脈を囓る行動 10時10分45秒~10時14分15秒



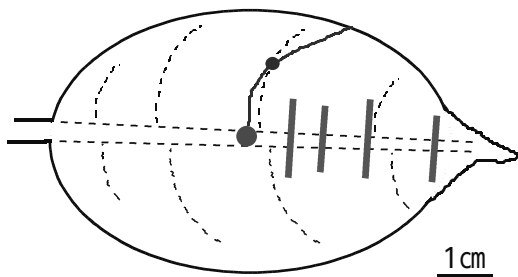
幼虫はブリッジから、主脈の左右に身を乗り出し、葉の様子をうかがった後、主脈(緑丸大)を囓る行動をした。この行動は3分30秒続いたが、主脈は完全には分断していない。

6 左葉を切る行動 10時14分15秒~10時22分28秒



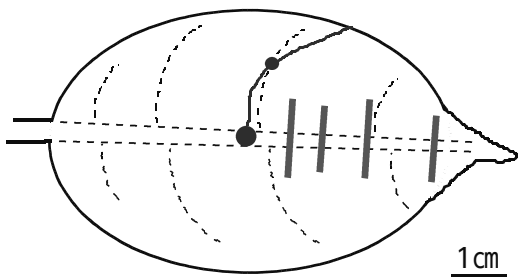
幼虫は主脈から左葉の外側に向かい、葉を切る行動をした(青線はその軌跡)。外側まで切るのに8分13秒を要した。葉の切れ具合から、側脈(緑丸小)は分断していない(図2)。

7 左側脈の分断 10時24分18秒～10時24分48秒



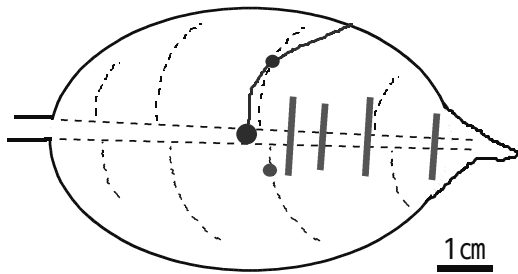
幼虫は左葉の外側から左側脈(青丸小)に戻り、左側脈を完全に分断した。分断は左葉が完全に左右に分かれることで確認できた。分断するのに30秒を要した。

8 主脈の分断 10時26分06秒～10時30分35秒



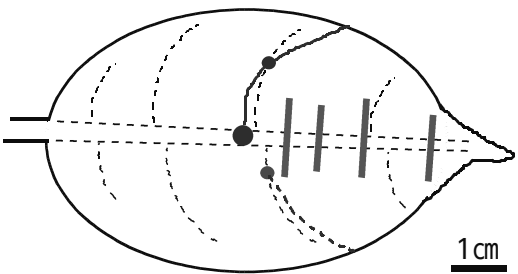
幼虫は左側脈(青丸小)から主脈(青丸大)に戻り、主脈を完全に分断した。分断は主脈の右側の葉が揺らぐことで確認できた。分断するのに4分29秒を要した(図3)。

9 右側脈を囓る行動 10時32分20秒～10時34分54秒



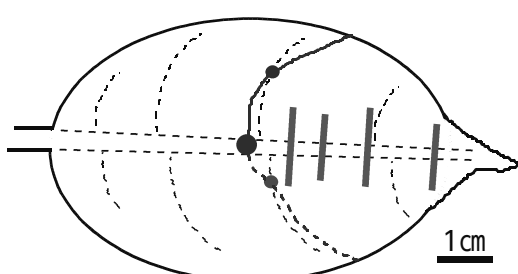
幼虫はブリッジから、主脈の左側に身を乗り出し、葉の様子をうかがった後、右側脈(緑丸小)を囓る行動をした。この行動は2分34秒続いたが、右側脈は分断していない。

10 左葉を切る行動① 10時34分54秒～10時42分07秒



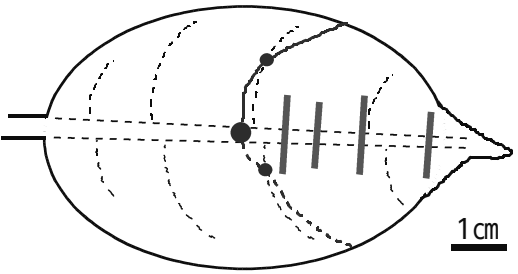
幼虫は右側脈を囓る行動に引き続き、右葉の外側に向かい、葉を切る行動をした(青破線はその軌跡)。外側まで切るのに7分13秒を要した。葉の右側は、大部分が切られ大きく傾いた。

11 左葉を切る行動② 10時43分31秒～10時45分49秒



幼虫は右側脈に戻り、主脈に向かい葉を切る行動をした(青破線の上部がその軌跡)。主脈まで切るのに2分18秒を要した。葉の右側(葉)は右側脈のみでつながり、垂れ下がる様相になった。

12 右側脈の分断 10時46分20秒～10時48分15秒



幼虫は右側脈(下の青丸小)に戻り、右側脈を分断し葉の右側(葉)を落下させた。落下させるまでに1分55秒を要した(図4)。後には、先の部分のない葉が残った(図5)。幼虫は落とした葉(葉)の断面を糸でつないでいた(図6)。



図1 ブリッジ②の製作



図2 左葉を切る行動



図3 主脈の分断



図4 最後に残った右側脈の分断

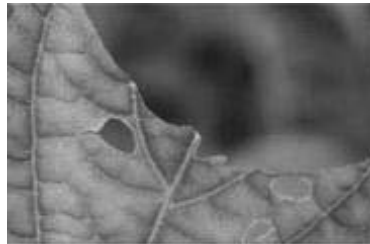


図5 残った先の部分のない葉



図6 落下させた葉の切断部を糸でつなく行動

## 考 察

[観察した事柄1~4 ブリッジ①~④の製作について]

この幼虫はブリッジを①→②→③の順で、つまり葉の中央部から外側に向かって作製していった。この方が物理的に左様と右葉を接近させやすいものと思われる。ブリッジ④は補強のため、施したのであろう。

[観察した事柄5、8 主脈を齧る行動・分断について]

幼虫は葉を切る最初として、主脈の1ポイントを選び、しばらく齧り続けた。しかし、主脈は分断しなかった。分断したのは左葉と左側脈を完全に切った後であった。これについては、先に主脈を分断すると葉が大きくそり曲がった状態となるため、葉が切りにくくなるためであると考えられる。

[観察した事柄6、7 左葉を切る行動・左側脈の分断について]

幼虫は緩やかなカーブを描いて、葉を切るため、巣は角のない形になる。この形にすることについて、巣を落下させるときの衝撃を抑えるためであると考えられる。左側脈は齧っただけで、左葉を切った後に分断するのは、先述の主脈の分断と同じ理由であると思われる。

[観察した事柄9、12 左側脈を齧る行動・分断について]

左側脈を最後に分断し巣を落下させたことについて、葉肉の部分は弱く巣の重さに持ちこたえられないため、側脈を最後に残すのであろう。また幼虫は、身体の大部分をブリッジ内に収めたまま、分断する作業が可能であるため、左側脈を選択したのであろう。身体がブリッジ内に十分収まっていない場合、落下の際、身体を傷つけたり、身体がブリッジ外に出てしまうこともありえるかもしれない。

[観察した事柄10、11 左葉を切る行動①②について]

左側脈を最後に分断する見通しで、左葉を切る行動をしたことがうかがえる。

## 参考文献

那須義次・広渡俊哉・岸田泰則 編 (2013) 日本産蛾類標準図鑑Ⅳ、学研、東京。  
矢田 脩 監修 (2007) 新訂 原色昆虫大図鑑 第I巻 (蝶・蛾 篇)、北隆館、東京。